

24OP9-10

小児のターミナル期における音楽療法の意義

市田 幸子、市田 幸子、坂口 佐知、榊原 オト、藤村 純也、
齋藤 正博、山城 雄一郎

順天堂大学 小児科・思春期科

【はじめに】

順天堂大学小児科・思春期科病棟では1995年から毎週1回「お歌の会」と称して、入院中の患児をプレイルームに集め、歌を歌ったり楽器を合奏する音楽療法を継続している。楽器などの「音」を使うことによって、言語では上手に表現できない子供でも素直に感情を表現することができる。

【目 的】

大人のホスピスなど、緩和ケア病棟で音楽療法が導入されている施設はあるが小児の緩和としての音楽療法は殆どない。今回、「楽しい時間」を一緒に作ることの一環として始めた音楽療法がターミナル期の子どもたちに対してどのような意義があるかを検討した。

【対象と方法】

2003年1月から2006年7月までターミナル期にベットサイドで個別の音楽療法を行った児12名(0y～7y)の家族を対象とした。任意の家族に直接インタビューを行い、家族の話をもとに音楽療法の意義について考察した。

【支援内容】

ターミナル期を迎え、グループ活動への参加が不可能になった時からベットサイドを訪問し個別にセッションを開始した。その際には「お歌の会」のグループでみんなが楽しむ内容とかけ離れることのないようなプログラムとし、更には両親・きょうだいと一緒に出来るもの、そして本人の望む楽器を中心として活動することを心がけた。また、看取りに立会い、希望があればセッションを行った。

【まとめと考察】

インタビューに対し『入院をした当初は病気の重大さの比重が大きく、「お歌の会」を紹介をされても、そのような活動に参加をさせる気持ちの余裕はなかった。しかし、少しずつ落ち着いてくるとグループセッションに参加をしている楽しそうな子どもの姿に救われた。』『意識がないわが子へも同じようにお歌を歌って下さり、お兄ちゃんたちと合奏をさせて貰えたことはこの子も楽しかったと思います。お兄ちゃんたちも一緒に共有できる時間が持てたことは素晴らしかったと思いました』などの回答があった。また、最期の看取りに立ち会う際に「皆さんで合奏しますか？」との問いに断られるご家族は皆無であり、家族全員が「ミニシンバルの合奏」をするひとときは荘厳であった。五感に直接働きかける音楽療法の時間は楽しい時間・癒しの時間のみならず、時としては痛みや苦痛の発散の方法でもある。ターミナルの子どもと家族に対して、非言語コミュニケーションの一つである音楽療法についてさらに考察を重ねて報告する。

24OP9-11

ターミナル期のがん性疼痛のある患児との関わりを考える
～2症例の母親の思いを聞いて～海老原 友美¹⁾、高岡 美和子¹⁾、八木 牧子²⁾埼玉県立小児医療センター 内科第一病棟¹⁾、埼玉県立小児
医療センター 外科第二病棟²⁾

【目的】 がん性疼痛にある患児をもつ母親がどのように痛みを捉えているのかを知り、看護師の患児と母親に対する今後の関わり方について検討する。

【方法】 半構成的面接にて2人の母親から研究の同意を得て話を聞き、その内容を分析しまとめる。

【結果・考察】 面接内容を a.「母親から見た患児の痛みの捉え方」 b.「看護師と痛みをもつ患児の関わりに対する母親の思い」に分けた。a に対しては「痛みの表現がわからない様子が子どもにある」「表現も『微妙』とはっきりしない」等があった。母親のこのような話から、フェイススケール(6段階)での痛みの確認方法だけでは表現できない痛みが生じた際に、患児がうまく伝えられず、苦痛を感じていたことを知った。よって、フェイススケールに頼るのではなく患児の言動、体位、動き、表情、しぐさ等も観察していかなければならないことに気付いた。母親との情報交換を積極的に行い、痛みについての理解を共有することが大切だと改めて感じた。b に対しては「痛みに対して聞くときはカーテンを閉めて小声で聞いて欲しい」「看護婦さんをお願いしたいことは・・・小声で痛みを聞いてほしい。言葉の中に痛みをわかろうとする意識を持って欲しい」等があった。看護師が考えている以上に母親が周囲の人に患児の現状を知られたくないという思いがあることに気付いた。この言葉から周囲の状況を確認したうえで、痛みについて聞く配慮が必要であると感じた。また、患児と関わる際には痛みを深く理解しようとする意識を持つ事の重要性を再認識した。

【まとめ】

1. 痛みに対してはフェイススケールに頼るのではなく、言動・体位・動き・表情・しぐさ等の患児の様子を観察する
2. がん性疼痛の全人的痛みの理解を深める
3. 疼痛評価表を本人に合うもので使用して評価していく
4. 痛みについて患児に聞くときは小声で話す等の周囲に対する配慮をしていく
5. 家族からの話を聞き、患児の痛みについての理解の共有をする
6. 患児と関わる際には痛みを深く理解しようとする意識をもつ